

探究型歴史学習の高大接続

丸橋充拓 大日方克己 鹿住大助

中村怜詞 日高智彦 割田聖史

まえがき

2025年4月、現行学習指導要領のもと、高等学校で「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」を学んだ一期生たちが、大学の門をくぐった。

現課程では、新たな学びの看板として「探究」が掲げられる。彼ら／彼女らは、この学びに3年間取り組んできた学年である。高校において全面施行された新教育の実りを、大学はどうしたら受け止めることができるのか。その準備はできているのか。

大学における歴史教育といえば、かつては歴史専攻生に対する専門教育に関心が集まり、非歴史専攻生向けの教養教育は「専門を薄めたもの」で良しとされるのがせいぜいであった。だが「専門への関心が薄い層」に「専門を薄めた教育」を提供しても、響くはずがない。「学びの賞味期限」は期末試験までで、単位修得が成れば、その後には何も残らない。歴史専攻生以外にとって教養課程は最後の歴史学習機会であるから、そこで霧消した歴史学習の成果は、その後の市民生活に全く影響を及ぼせていないことになる。「高から大への接続」の次に来るべき「大から市民への接続」は、そのころ眺望が不透明であった。

こうした状況への危機感から、2000年代から2010年代にかけて、教養課程を重視し、本格的に取り組む動きが現れる。まず牽引役を務めたのが大阪大学歴史教育研究会であり、その成果はテキスト『市民のための世界史』（大阪大学出版会、2014）に結実した。同年の日本学術会議史学委員会報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 歴史学分野」は、非歴史専攻生を含む「全ての学生」が獲得をめざす基本的な素養を提起した。2015年に創立した高大連携歴史教育研究会に、大学教養教育を担当する専門部会（第5部会）が設けられたのも、そうした流れを承けてのものであった。

そしてそうこうしているうちに、高校歴史教育の新課程が、次なる指導要領のもとで2022年度からスタートすることが公表された。新指導要領世代を迎えるまでに大学に与えられる準備期間が2025年3月までであることも、同時に明らかとなった。冒頭に述べた「高校において全面施行された新教育の実りを、大学はどうしたら受け止めることができるのか」という問題意識が、ここに切実に立ち上がることとなった。

そこでわれわれは、同じ問題意識を共有するメンバーで共同研究を立ち上げることにした。研究代表者（丸橋充拓）の勤務校（島根大学）の学内助成等を得ながら活動を徐々に軌道に乗せ、最終的には日本学術振興会の科学研究費補助金による支援を受けることができた。2020年度から6年間継続することになる共同研究「探究型歴史学習の高大接続モデル開発：新学習指導要領世代をグローバル市民に」（基盤研究（B））である（以下「本共同研究」と称する）。

本共同研究は、高校歴史科目において本格導入が進む探究型歴史学習に着目する。それを通じて得られる資質・能力をルーブリックに落とし込んで学習成果を評価可能にするとともに、それに基づく歴史授業モデルを開発し、授業を実施した。

研究組織は、島根大学に属する研究者 4 名（丸橋充拓・大日方克己・鹿住大助・中村怜詞）が中核となり、島根大学の授業科目「大学で学ぶ世界史 講義編」「大学で学ぶ世界史 探究編」「山陰の歴史 古代中世」の 3 科目を主な実践の場としつつ、東京学芸大学・青山学院大学（日高智彦・割田聖史が勤務）や近隣の高校の協力を得ることができた。学習教材に「地域と世界を架橋するグローバルな視野」や「市民として生きていくことに結びつく知見」の獲得に資する題材を選んでいることも、本共同研究の特徴である。

そして本書は、本共同研究 6 年間の成果を、以下の構成でまとめたものである。

まず第 1 部には、探究型歴史学習をめぐる現状について包括的・具体的に分析する論考 3 本を配する。第 1 章（割田論文）は大学歴史教育論の変遷を取り上げ、日本ではそれがまだ十分に形成されていないこと、歴史を教授する「場」が多様で共通指針が設定しにくく、その「目的」も時期によって変化してきたことを指摘し、そうした現状のもとで本共同研究が持つ意義について論及する。第 2 章（日高論文）は高校歴史教育における探究の論理を歴史的に跡づけ、探究のアップデートを難しくしている要因を探りつつ、アップデートに参照しうる実践の提示を試みる。第 3 章（中村論文）は現行学習指導要領で取り入れられた探究的な学びの現況を分析し、実施を困難にしている要因、実施に必要な教師の専門性、必要な支援について、2 名の高校教師に対するインタビューをもとに検討する。

次いで第 2 部には、島根大学および協力校で実施した探究型歴史学習の実践と成果に関する論考 4 本を置く。第 4 章（中村・梨子田論文）は、本共同研究で開発した歴史的思考力を評価するルーブリックについて、梨子田喬氏（本共同研究の協力者）が実施している高校の探究型歴史授業に用いた場合における有効性と課題を探り、さらなる改善を図る。第 5 章（鹿住論文）は大学の教養授業において受講生の学習観を転換させる要因を、島根大学での授業実践を通じて分析し、探究学習の可能性を論じる。第 6 章（丸橋論文）は課題探究を通じて歴史的思考力を育成する大学教養授業の実践を紹介し、第 4 章と同じルーブリックを用いて高大を通貫する思考力評価を試みる。第 6 章（大日方論文）は日本史・世界史を横断的に学ぶ高校「歴史総合」を踏まえ、これを継承する大学教養授業のあり方として、山陰地域と世界史を架橋する授業の実践を紹介する。

大学教養課程は、高校生・大学生から市民へと学びを積み重ねていく上での要に位置する。しかしながら、それに特化した教育の方法論はまだまだ錬成の余地が大きい。本書で提起できるのは誠にささやかな試みに過ぎないが、歴史教育に従事する先生方の今後に僅かなりとも手がかりを提供することができたなら、喜びこれに勝るものはない。

* 本共同研究は、JSPS 科研費 20H01300・23K20104 の助成を受けたものである。

* 本共同研究は、島根大学法文学部における人を対象とする研究倫理審査を受け、承認を得たものである（2022 年度・2025 年度）。

目次

まえがき

第1部 歴史学習の現在地

第1章 「大学歴史教育」論の研究史的検討

—歴史教育の高大接続のために— 割田聖史 3

第2章 高校歴史教育における探究の論理と実践上の課題 日高智彦 21

第3章 探究的な歴史授業を促進するために

—高校歴史科教員の語りに基づく実践的課題の分析— 中村怜詞 37

第2部 探究型歴史学習の実践

第4章 歴史的思考力を問う課題と評価ルーブリックの開発

中村怜詞・梨子田喬 53

第5章 大学生の歴史学習観の変容を促す教養教育の授業方法とは何か

—「大学で学ぶ世界史：講義編」と「探究編」の授業実践から—

鹿住大助 73

第6章 大学教養課程における歴史的思考力の育成

—高・大・市民を結ぶ—

丸橋充拓 105

第7章 グローカル視点の大学教養科目としての地域史・日本史授業

—「歴史総合」を受けて—

大日方克己 119

あとがき

145

あとがき

高校・大学における歴史教育のあり方については、今日数多くの知見が積み重ねられてきている。高大連携歴史教育研究会をはじめ、人的な交流も活況を呈している。

そうしたなか、「歴史学習」を掲げる本共同研究は、学習者の学び方に焦点を当て、得られた知見に基づいて、高・大、そして市民へと接続できるような教育内容および評価方法を検証・提示した点に特色があると考えている。

本共同研究は、島根大学という小規模な地方大学における、中位学力層かつ多分野の受講生が混在する授業を基軸に据えた取り組みではあるが、それはむしろボリュームゾーン of 学生・市民に幅広く応用しうる可能性があるとも考えられ、汎用性という意味では存外にはポテンシャルを備えているかもしれない。今後の実践を通じ、幅広い検証を待ちたいと思う。

まえがきでも触れたように、本共同研究は6年間にわたり科学研究費補助金の支援をいただいたが、教育学を専門としない歴史研究者が「教育を学術研究のテーマにする」ことはやはり難しく、採択に至るまでには年数を要した。その期間、全学萌芽研究部門プロジェクトや学部長裁量経費などの形で、繰り返し支援をいただいた島根大学及び法文学部にも、日本学術振興会ともども謝意を表したい。

2020年春、ようやく科研に採択され、研究をスタートさせようと思ったら、いきなりコロナ禍に見舞われた。探究型学習をオンライン授業で実践することはやはり難しく、最初の2～3年は手探りの連続だった。そうしたなかでも公開シンポジウムやワークショップを開いた際には、いつもたくさんの方々に参加してくださった。たいがいオンライン単独、あるいはハイブリッド開催であったが、交通不便の地にとっては参加のハードルが下がり、むしろありがたい面も多かった。

3年目くらいからは対面授業における探究学習の経験値も蓄積し、成果が形になり始めた。2022年度に丸橋個人として、2024年度には本共同研究全体の公開企画パネルとして、成果報告の機会を頂戴した高大連携歴史教育研究会にも、心より感謝を申し上げたい。

高大連携の裾野はこの十年で大きく広がったが、課題はまだ多い。本共同研究はこれで終了となるが、関係各位とは今後もひきつづき協力を続け、新たな実りを探っていきたいと願っている。

2026年2月

研究代表者 丸橋 充拓

〈執筆者紹介〉 2026年3月現在

丸橋 充拓 (研究代表者)	島根大学法文学部 教授
大日方克己 (研究分担者)	島根大学法文学部 名誉教授
鹿住 大助 (研究分担者)	島根大学大学教育センター 教授
中村 怜詞 (研究分担者)	島根大学大学教育センター 准教授
日高 智彦 (研究分担者)	東京学芸大学教育学部 准教授
割田 聖史 (研究分担者)	青山学院大学文学部 教授
梨子田 喬 (研究協力者)	西大和学園中学高等学校 教諭